

全日本教職員連盟 全国アンケート⑦

教員の考える適正な学級規模について

調査結果



全日本教職員連盟

全日本教職員連盟 全国アンケート⑦

「 教員の考える適正な学級規模について 」

1 調査背景のポイント

- 国際的にみた1学級あたりの児童生徒数は、小学校でOECD加盟国平均21.4人に対して、日本は28.0人、中学校ではOECD加盟国平均23.5人に対して日本は32.9人となっている。
- 平成23年度には小1の35人以下学級を実施し、文部科学省の調査によると「子供たちの学習意欲の向上やきめ細やかな指導に大きな効果があった」との結果が出ており、更なる学級規模の縮小が望まれる。
- 全日教連はこれまで、児童生徒の学力向上やいじめ問題等の教育諸課題に適切に対応するために、義務教育諸学校及び高等学校の標準法の改正による全学年での35人以下学級の実現と加配教員の充実に要望している。

2 調査の目的

- 教育諸課題に対応し、教育的効果を上げるために、適正な学級規模、学習集団の人数等について会員の意見を聞く。
- 会員の意見をもとに改めて全日教連の見解をまとめ、提言・要望活動に生かす。

3 調査の方法と期間

平成25年10月15日～平成25年12月15日までの間、全国の加盟単位団体に依頼し、小学校、中学校、高等学校の教職員1,173名から回答を得た。

4 調査結果の概要

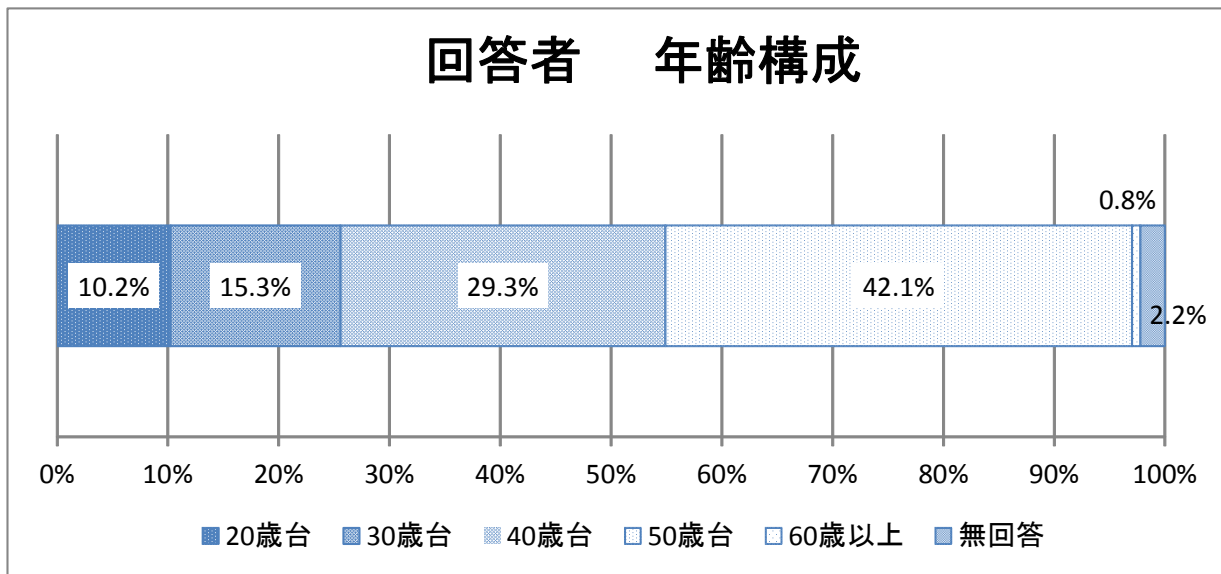
アンケートに回答した9割以上の教員が現状の学級規模は適正ではなく、30人以下の学級規模が望ましいと考えていることが分かった。学級経営（児童生徒指導を含む）上及び学習指導（教科指導）上の両面で、このように認識しているということは、学級の児童数が30人以上では児童一人一人に目が行き届きにくく、個に応じたきめ細かい指導を実践することに困難を感じていると考えられる。また、小学校低学年ではより少人数を求める傾向が強いことも分かった。

小学校においては、学校規模にもよるが、低学年では4人に1人が、中・高学年においてもおよそ3人に1人の教員が学級31人以上の児童数を抱えている現状が見られた。中学校、高等学校を含め全体的に言えることは、学級経営（児童生徒指導を含む）上はある程度人数が必要だと感じている教員がどの校種にも多く、学習指導（教科指導）上はより少人数を求める傾向が強いことが分かった。

5 回答者の構成

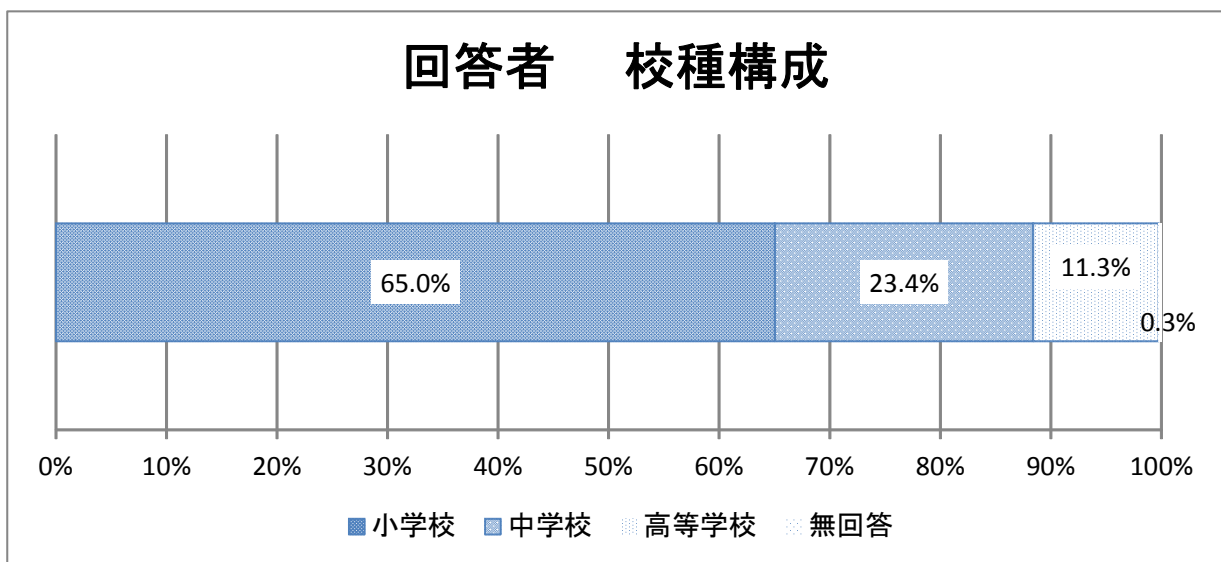
○ 回答者 年齢構成 (人数)

20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳以上	無回答	合計
120	180	344	494	9	26	1173



○ 回答者 校種構成 (人数)

小学校	中学校	高等学校	無回答	合計
764	273	133	3	1173



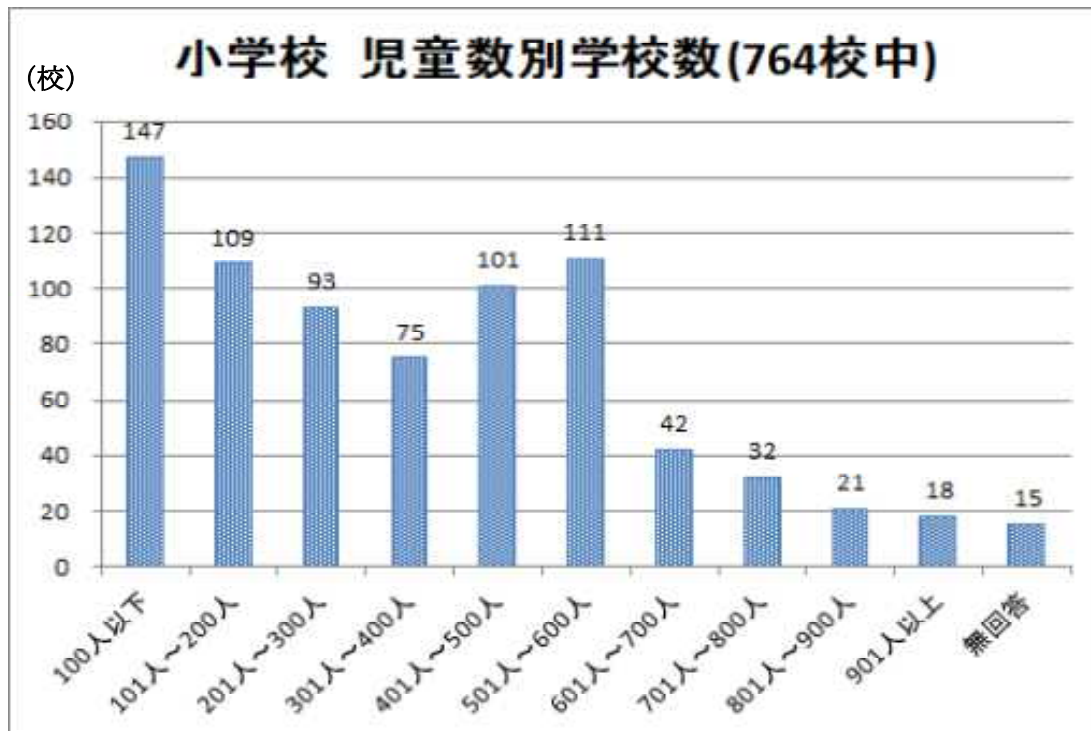
6 調査結果と分析

(1) あなたの勤務校及び担任する学級についてお答えください。

① 勤務校の規模についてお答えください。

<小学校>

○ あなたの勤務校の児童生徒数は何人ですか。

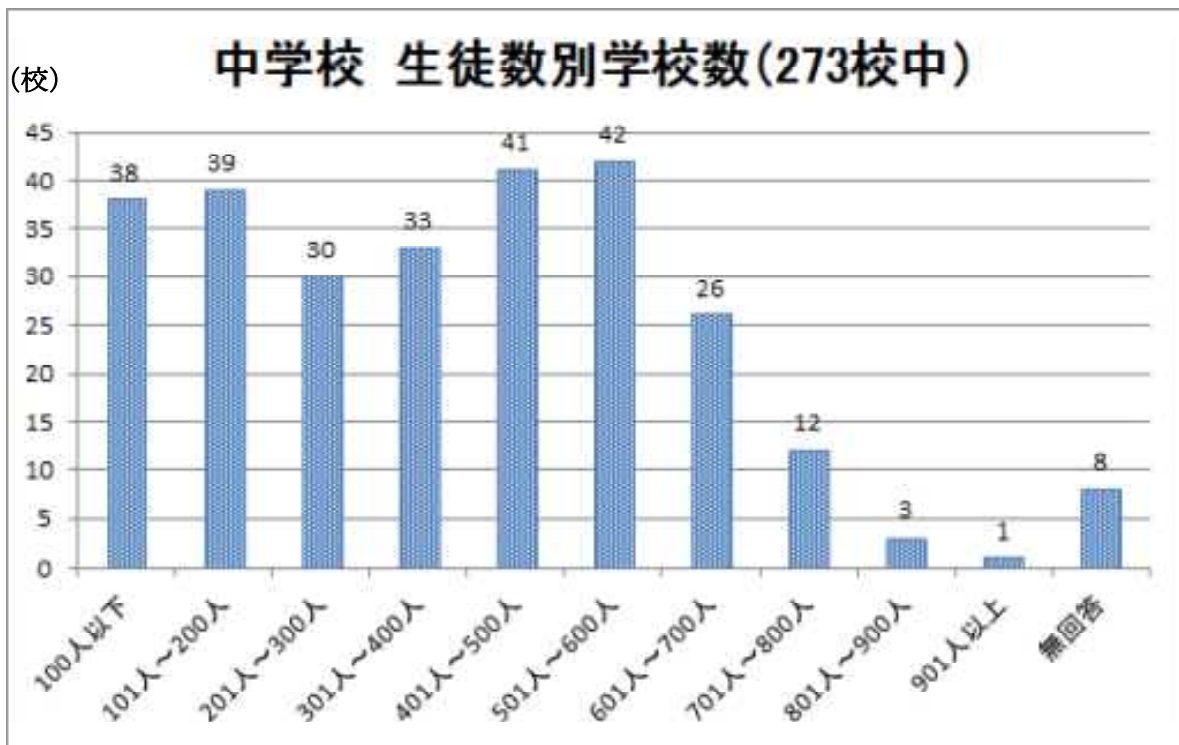


○ あなたの勤務校の学級数はいくつありますか。

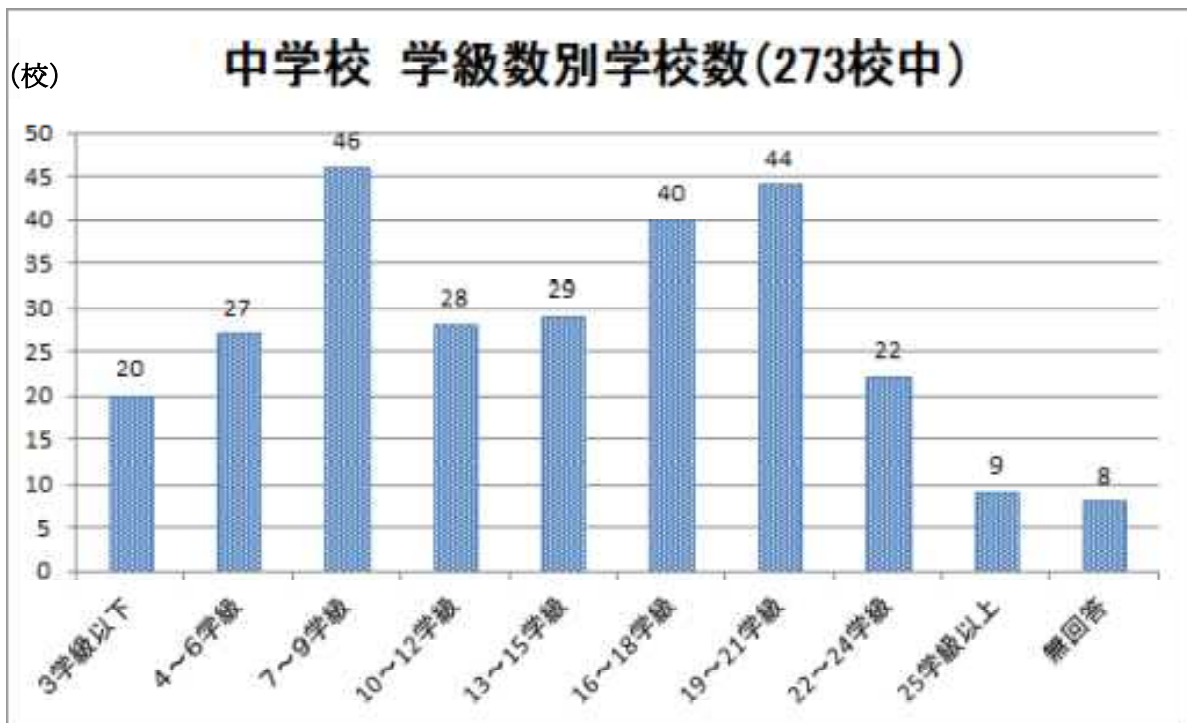


<中学校>

○ あなたの勤務校の児童生徒数は何人ですか。

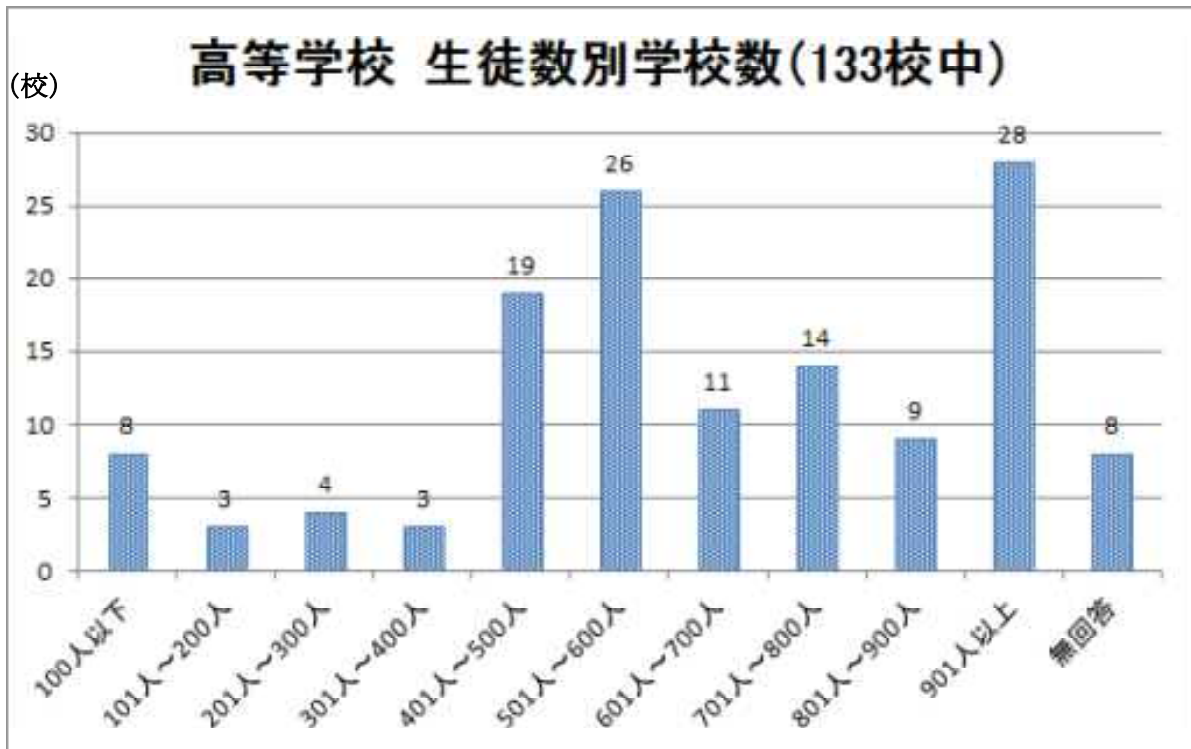


○ あなたの勤務校の学級数はいくつありますか。

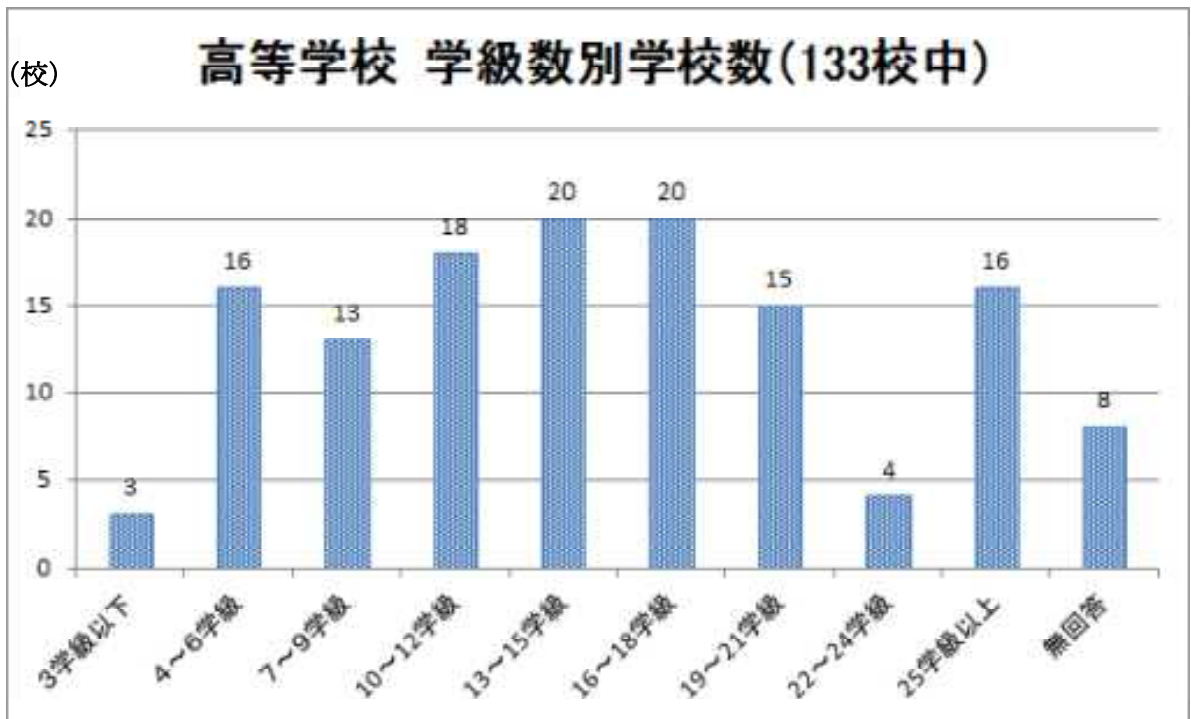


<高等学校>

○ あなたの勤務校の児童生徒数は何人ですか。



○ あなたの勤務校の学級数はいくつありますか。



② 学級担任の方にお聞きいたします。

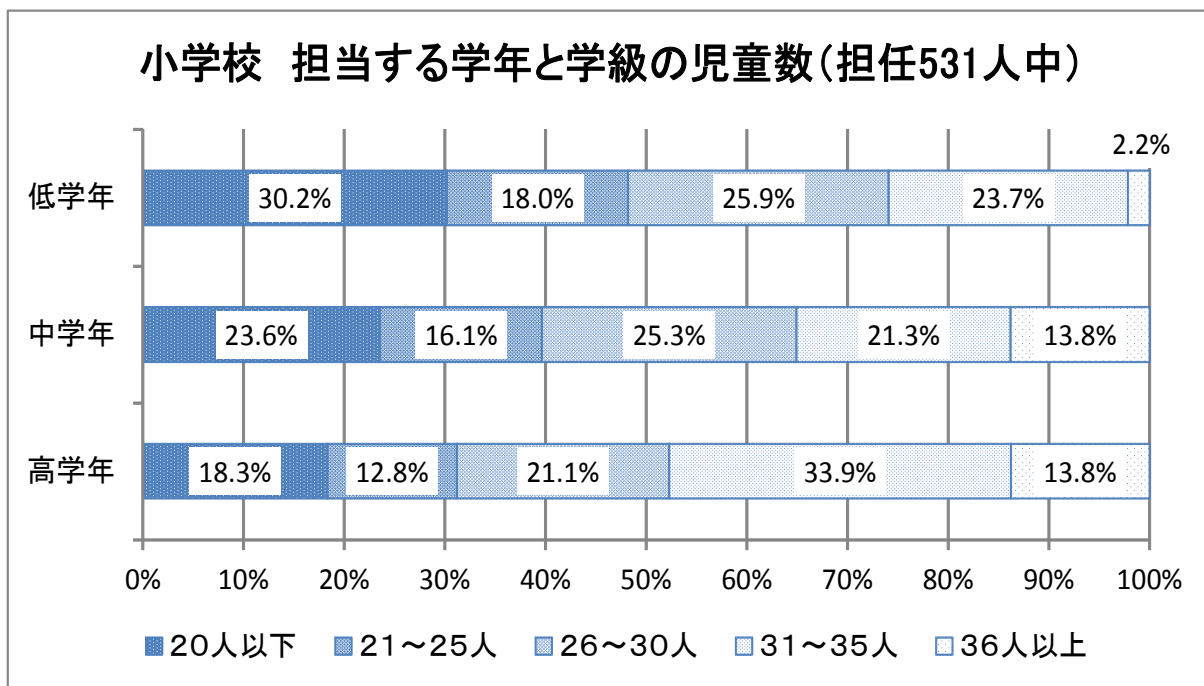
○ あなたの担任する学級の学年を○で囲んでください。

小1 小2 小3 小4 小5 小6
 中1 中2 中3 高1 高2 高3

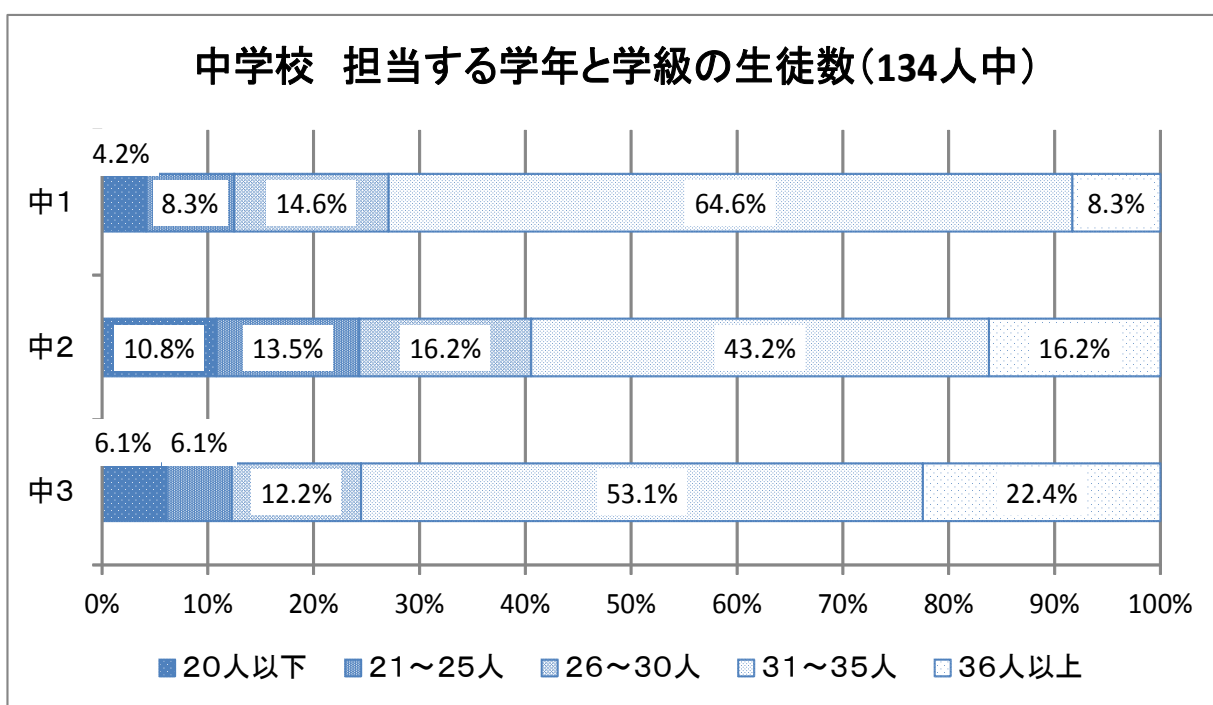
※ 複式学級等の場合は在籍する児童生徒の学年全てに○をつけてください。

○ あなたの担任する学級の児童生徒数は何人ですか。

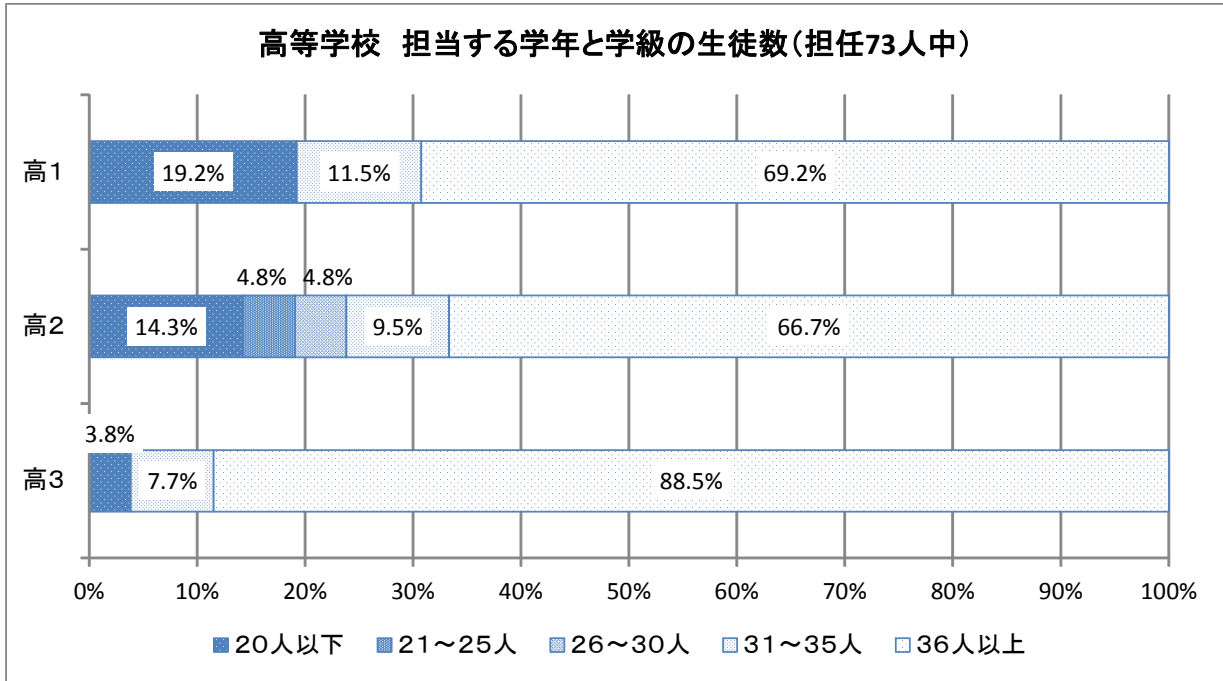
<小学校>



<中学校>



<高等学校>



傾向と考察

小学校においては、低学年担任のおよそ25%、中学年担任のおよそ35%、高学年担任のおよそ45%が、児童数30人を越える学級を受け持っていることが分かる。学年が上がるほど、学級の児童数が多くなる傾向にある。

中学校においては、中学1年・中学3年担任のおよそ70%、中学2年担任のおよそ60%が、生徒数30人を越える学級を受け持っている。

高等学校では、高校1年・高校2年担任のおよそ80%、高校3年担任のおよそ95%が、生徒数30人を越える学級を受け持っている。

○ 現在担任をしている学級の児童生徒数で、指導上問題点があればお書きください。

<小学校>

- ・ 学力差や発達障害的傾向のある児童へ対応するには児童数が多過ぎる。
- ・ 発達障害的傾向のある児童が、感情のコントロールができずにパニックになることが多く、指導が大変である。またそのような児童の気分で、学級の雰囲気が変わることがある。
- ・ 個別の支援が必要な児童が多く、手が回らなかったり、十分に指導できなかつたりすることが多い。
- ・ 人数が多いため、一人一人に目が行き届かない。また、人数が少ない学級と比べると、全体的に子供が落ち着かないように感じる。また、児童間のトラブルも起きやすい。
- ・ 人数が多いため、個に応じた指導援助、一人一人へのきめ細やかな対応がなかなかできない。
- ・ 児童数が多いため、机の数が増えることで教室も狭くなり、机間指導が大変である。また、鍵盤ハーモニカや体育着等の収納場所も不足し、困っている。
- ・ 3年生の時に40人×3学級だった子供たちが4年生から31人×4学級になり、とても落ち着いた。教室内のけがも減った。雑音も減ったためか学習に集中することもできるようになった。学校内の

物は40セットになっているものが多く、年度途中で児童数が増えて40人を超えると大変不自由した。

<中学校>

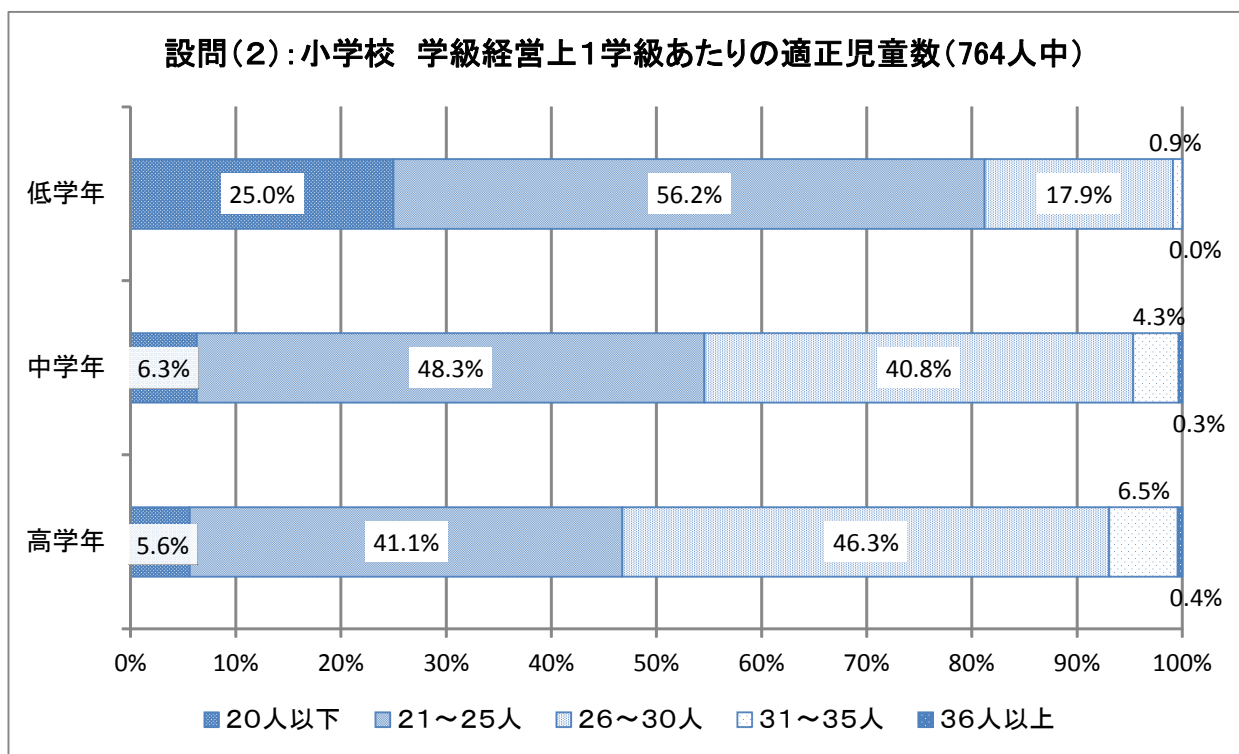
- ・ 一人一人の進路指導・生徒指導をする際に人数が多く感じ、個々と話す時間が少なく感じる。
- ・ 一人一人の指導に目が行き届きにくい。数人の問題行動の多い生徒の対応に追われてしまう。
- ・ 全体での指導が通りづらく、個人的に声かけが必要な子が多い。そういう生徒は、一斉授業の中では学習内容の定着が難しい。またキレやすい生徒も多くなっている気がする。
- ・ 通常学級に発達障害傾向の子供たちが増えてきていることもあり、学級の人数が多いと配慮を要する子供たちに十分な支援が難しくなる。
- ・ 人数が多いため、教室が狭く、荷物を置くスペースも足りていないのが現状である。

<高等学校>

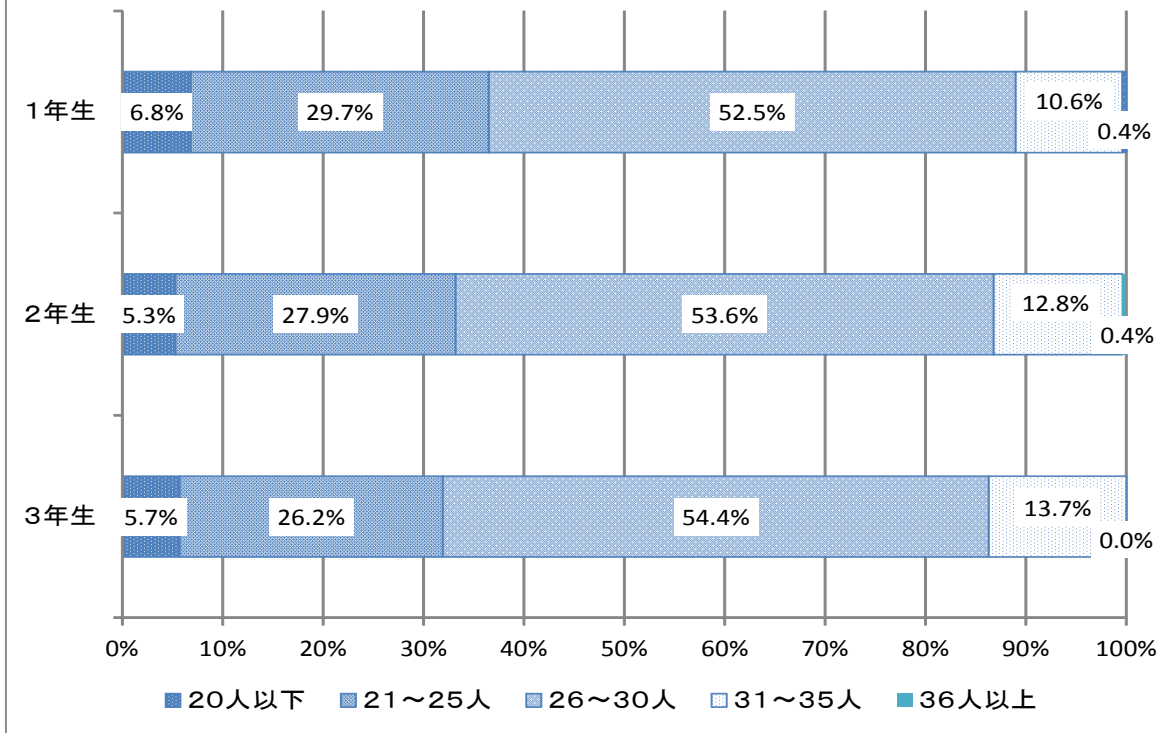
- ・ 一人一人に関わる時間が少ない。
- ・ 生徒指導面で困難な部分があるため、一人一人にきめ細かい指導が届かない。
- ・ 担当学級内に学力の格差がある。
- ・ 学力の低さ、日常のマナーや態度、素行（喫煙）面、保護者の対応等の問題が多く指導が行き渡らない。

(2) 学級経営（児童生徒指導を含む）上、あなたは1学級あたりの平均児童生徒数はどれくらいが適正だと考えますか。あなたの校種の全ての学年について、ア～オから1つ選び○を付けてください。

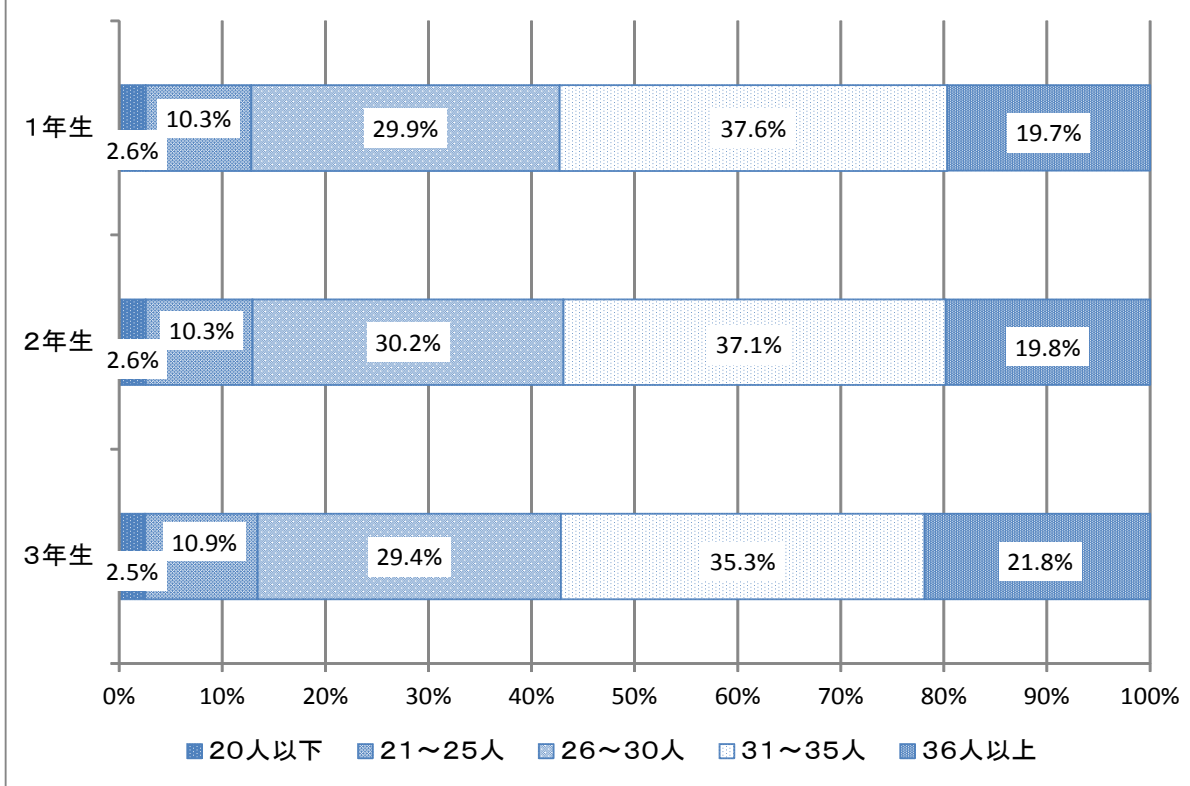
[1学級あたりの児童生徒数]
 ア 20人以下 イ 21人～25人 ウ 26人～30人 エ 31人～35人 オ 36人～40人



設問(2): 中学校 学級経営上1学級あたりの適正生徒数(273人中)



設問(2): 高等学校 学級経営上1学級あたりの適正生徒数(133人中)



傾向

○ 小学校教員

低学年では、この「21~25人」を適正と考える教員が56.2%と突出している。現在「31~35人」規模

の学級を受け持つ教員の割合が23.7%であるのに対し、その人数規模を適正と考える割合は0.9%である。「20人以下」または「21～25人」を適正とする割合は合計で80%以上になる。

中学年では、現在「21～25人」規模の学級を受け持つ教員の割合が16.1%であるのに対し、その人数規模を適正とする割合は48.3%と最も高くなっている。同様に、現在「26～30人」規模の学級を受け持つ教員の割合が25.3%であるのに対し、その人数規模を適正とする割合は40.8%と二番目に高い。「21～25人」または「26～30人」を適正とする教員の割合は合計89.1%と高いことが分かった。また、現在「20人以下」の学級規模を受け持つ教員の割合は23.6%、「31～35人」規模の学級を受け持つ教員の割合は21.3%であるのに対し、それらの人数規模を適正とする割合はそれぞれ6.3%と4.3%と低くなっている。

高学年では、現在「26～30人」規模の学級を受け持つ教員の割合は21.1%、また「21～25人」規模の学級を受け持つ教員の割合は12.8%であるのに対し、それらの人数規模を適正とする割合はそれぞれ46.3%と41.1%で、合計すると87.4%と高いことが分かった。現在「20人以下」の学級を受け持っている教員の割合が18.3%であるのに対し、その人数規模を適正とする割合は5.6%と低い。「31～35人」規模の学級を受け持っている教員の割合が33.9%であるのに対し、その人数規模を適正とする割合は6.5%である。

○ 中学校教員

中学校では、どの学年においてもウの「26～30人」規模の学級を受け持つ教員の割合が、12～15%であるのに対し、その人数を適正とする教員の割合は50%以上と最も高いことが分かる。また、現在「21～25人」規模の学級を受け持つ教員の割合が、中1で8.3%、中2で13.5%、中3で6.1%であるのに対し、その人数規模を適正と考える割合は、中1で29.7%、中2で27.9%、中3で26.2%と二番目に高いことが分かる。逆に、現在「31～35人」規模の学級を受け持つ教員の割合が中1で64.6%、中2で43.2%、中3で53.1%であるのに対し、その人数規模を適正とする割合は10%を少し越える程度である。

○ 高等学校教員

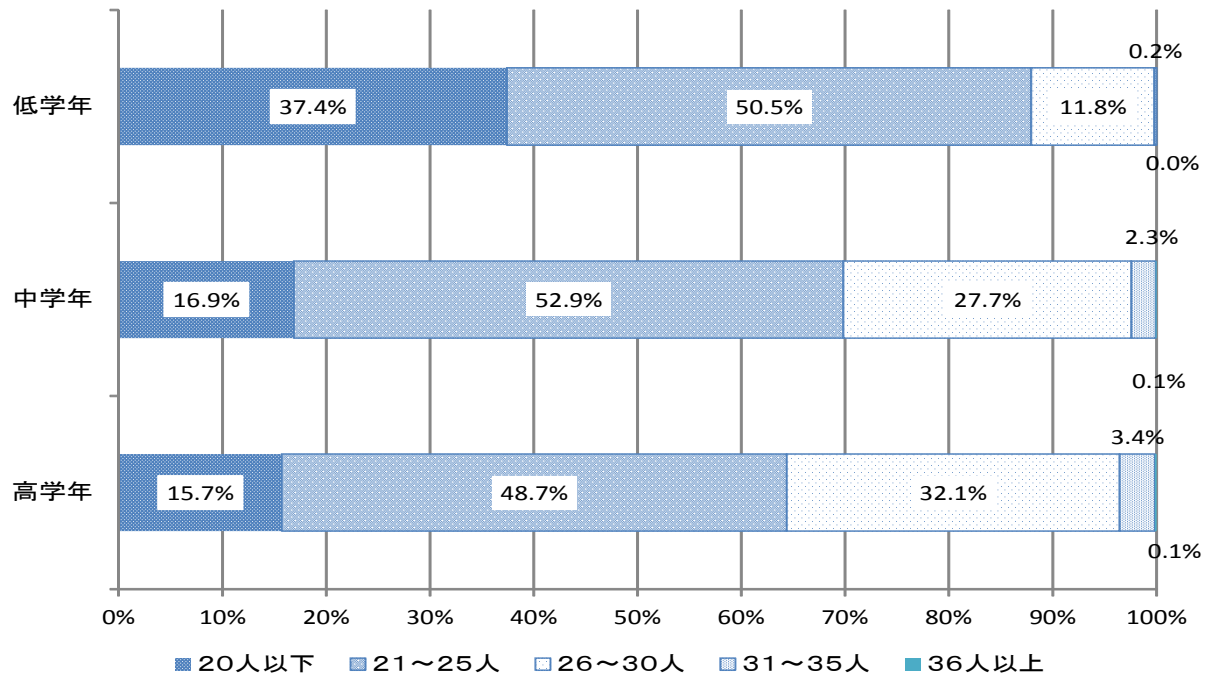
高等学校では、エの「31～35人」規模の学級を受け持つ教員の割合が、高1で11.5%、高2で9.5%、高3で7.7%であるのに対し、その人数規模を適正とする割合は、高1で37.6%、高2で37.1%、高3で35.3%と最も高い。また、「26～30人」規模の学級を受け持つ教員は少ないが、その人数規模を適正とする割合はどの学年も二番目に高い。逆に「36人以上」の学級を受け持つ教職員の割合が、高1で69.2%、高2で66.7%、高3で88.5%であるのに対し、その人数規模を適正とする割合は、高1で19.7%、高2で19.8%、高3で21.8%と低くなっている。

(3) 学習指導（教科指導）上、あなたは1つの学習集団あたりの平均児童生徒数はどれくらいが適正だと考えますか。あなたの校種の全ての学年について、ア～オから1つ選び○を付けてください。その際、中学・高校の方は□の中に担当教科名を記入してください。

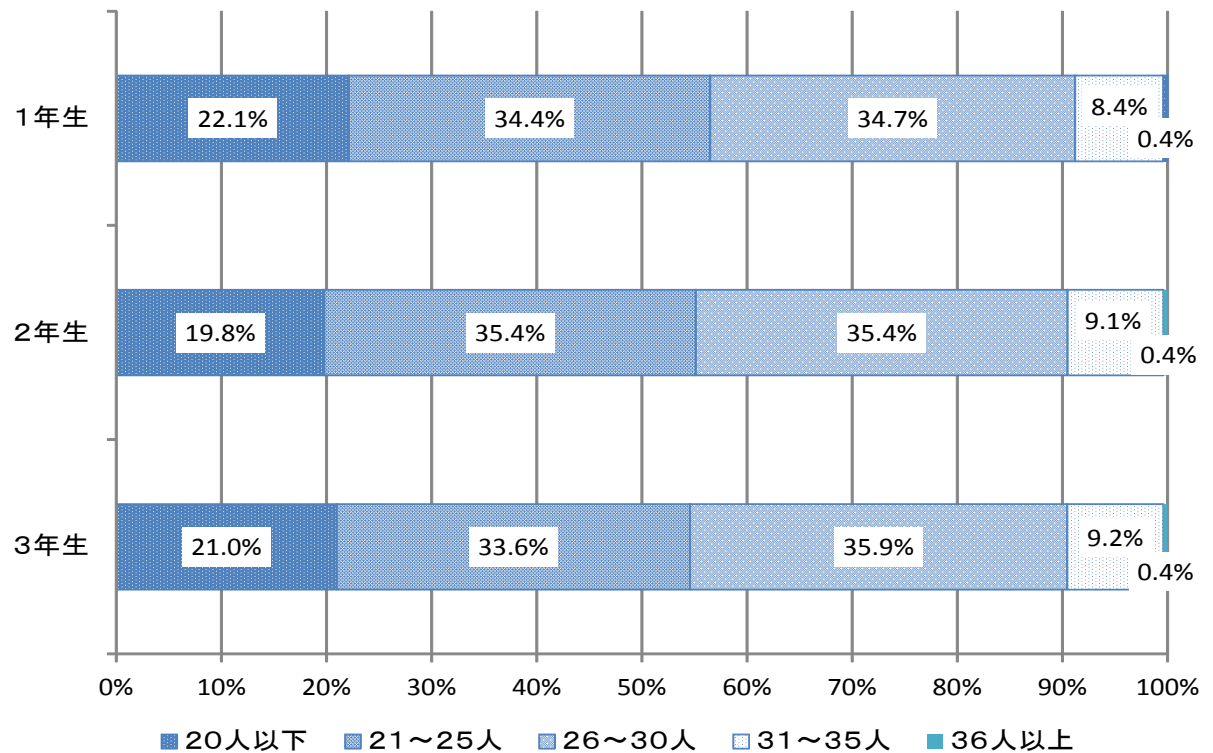
【1学級あたりの児童生徒数】

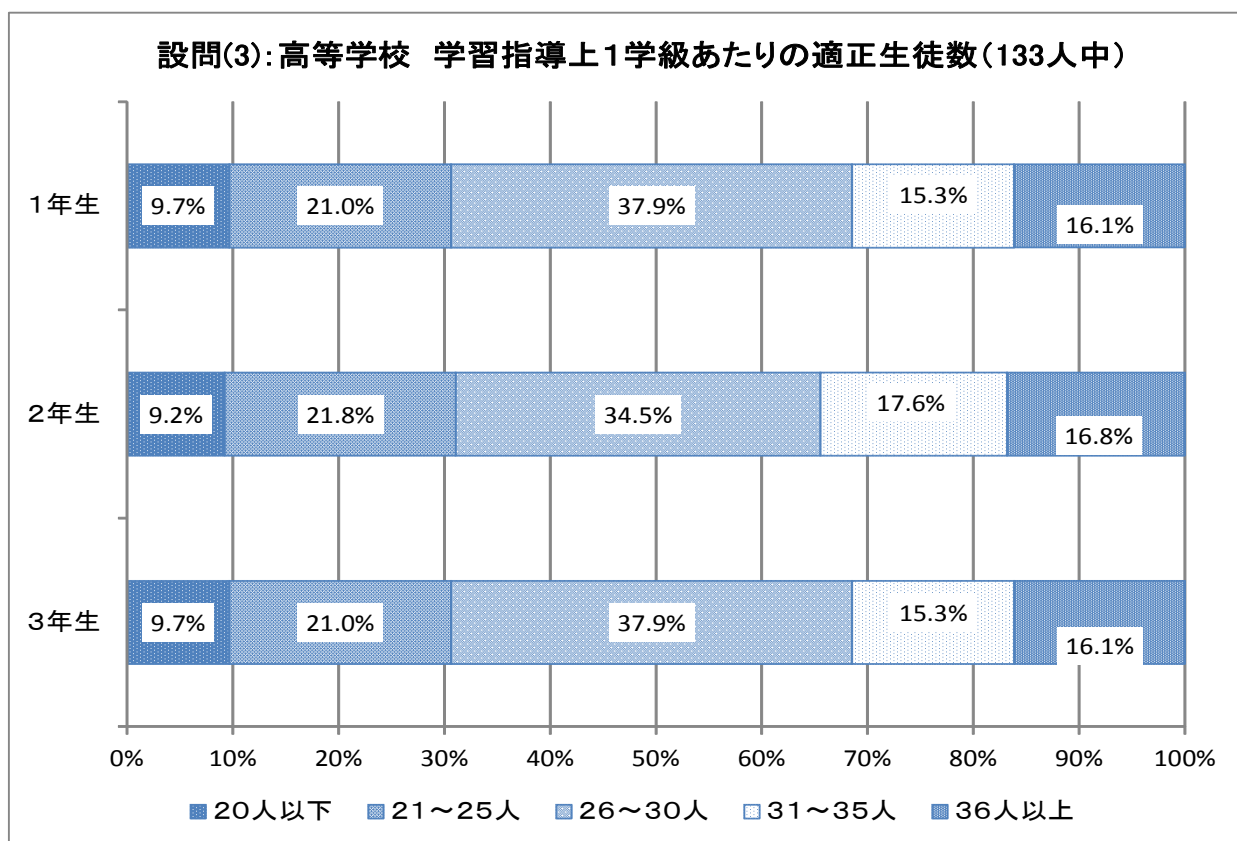
ア 20人以下 イ 21人～25人 ウ 26人～30人 エ 31人～35人 オ 36人～40人

設問(3):小学校 学習指導上1学級あたりの適正児童数(764人中)



設問:(3)中学校 学習指導上1学級あたりの適正生徒数(273人中)





傾向

○ 小学校教員

低学年では、「21~25人」を適正とする割合が50.5%と最も高い。現在、「20人以下」の学級規模を受け持つ教員の割合が30.2%であるのに対し、その人数規模を適正とする割合は37.4%と二番目に高い。「31~35人」規模の学級を受け持つ教員の割合が23.7%であるのに対し、その人数規模を適正と考える割合は0.2%しかない。

中学年では、「21~25人」規模の学級を受け持つ教員の割合が16.1%であるのに対し、その人数の規模を適正とする割合は52.9%と最も高い。現在「31~35人」の学級を受け持つ教員の割合は21.3%、「36人以上」の学級を受け持つ割合は13.8%であるのに対し、それらの人数規模を適正とする割合は、2.3%と0.1%でとても低い。

高学年では、現在「21~25人」規模または「26~30人」規模の学級を受け持つ教員の割合はそれぞれ12.8%と21.1%であるのに対し、それらの人数規模を適正とする割合はそれぞれ48.7%と32.1%で、合計80.8%と高い。また、現在「31~35人」規模または「36人以上」の学級を受け持っている教員の割合がそれぞれ33.9%と13.8%であるのに対し、その人数規模を適正とする割合はそれぞれ3.4%と0.1%と低い。

○ 中学校教員

中学校では、どの学年においても「21~25人」規模または「26~30人」規模の学級を受け持つ教員の割合が、18~30%であるのに対し、その人数を適正とする教員の割合は約70%と高いことが分かる。逆に、現在「31~35人」規模の学級を受け持つ教員の割合が中1で64.6%、中2で43.2%、

中3で53.1%であるのに対し、その人数規模を適正とする割合は9%程度と低い値を示している。

○ 高等学校教員

高等学校では、現在「26～30人」規模または「21～25人」規模の学級を受け持つ教員の割合が低いのに対し、その人数規模を適正とする割合は併せて50%を超えることが分かる。逆に「36人以上」の学級を受け持つ教職員の割合が、高1で69.2%、高2で66.7%、高3で88.5%であるのに対し、その人数規模を適正とする割合は、高1で16.1%、高2で16.8%、高3で16.1%と低くなっている。

(4) (2) (3)の理由について、あなたの考えを御自由にお書きください。

○ 少人数学級を望む理由

【きめ細かな指導の実践・諸問題への対応のため】

- ・ 発達段階も考慮して人数が少ない方が一人一人の児童に目が行き届いた指導をしていきやすいから。現状の人数ではやはり多く、少しでも人数が減ればよりきめ細かに指導を行うことができる。
- ・ 一斉指導だけでは十分に指導できない児童が出てしまうので、一人一人の力をしっかり見取り確実に支援しながら伸ばすには少人数の方が良いと考えるから。手間をかければ伸びる子供が多くなる。
- ・ 多様な環境で育っている子供への対応・子供一人一人のニーズに応じた学習指導への対応のため。
- ・ 価値観が同じで学校に求められるものが同じであれば40人でも可かもしれない。しかし子供一人一人の個性も大きく違い、色々な価値が学校に求められるようになり学校の役割はますます大きくなっている。これらを果たすためには少人数であることは必須である。
- ・ 現在強く求められる学力、思考力・判断力・コミュニケーション力は、児童一人一人が自己の体験を通して身に付けていくべきものであり、そのためには、少人数学級での教師の細かな関わりが必要であると考えため。
- ・ 学級経営上はある程度児童数が多くても良いが学習指導上は少ない方が面倒を見やすいから。
- ・ いじめ等の問題のためにも、もっと密に関わりたい。
- ・ 進路や学習到達度が多岐にわたり統一的な指導が困難なので、きめ細やかに行うためには少人数にすべきと思う。ただし、指導できる力量が揃うことが必要である。

【要支援の子供たちのため】

- ・ 通常学級の中にも特別な支援を要する児童が年々増えてきており少人数でも対応が難しい状況もある。20人以下の本校の学級においてもそういった児童が増えており複数体制での支援をしているがかなり厳しさを感じる。少人数でもこうなのだから30人以上児童が在籍している状態では1人の担任が指導するのは間違いなく困難である。
- ・ 通常学級にも特別な支援を必要とする子は多くそういった子にかかる時間が多くなりがちである。その分、その他の子への気配り、目配りが少なくなることがあり、より少人数である方が細やかな経営ができると感じる。
- ・ 学習障害、情緒面等で支援が必要な児童生徒が増加し一人一人に対応するのがさらに難しくなっている。

- ・ 現在、どの学校でも通常学級に特別な支援を必要とする児童が在籍している。支援の内容は学習支援、生活支援ほか様々だが学級担任の負担は大きい。また保護者の学級担任へのニーズは大きくなるばかりでこの対応だけでも学級担任は大変な思いをしている。このような状況を解消する手立ての一つとして1学級の児童数を考慮することは重要だと考える。

○ 現状の問題点]

【小学校】

- ・ TT加配があっても毎時間ではない（大規模では、時数の関係で）こと。
- ・ 家庭教育の力が低下し、体を動かしたり考えたりする経験を積まずに入学してくる。だから生活（生徒）指導はどの学年も手がかかる。自身は小学校の教員になって長い、年々そのような傾向が強くなっていると思う。日本の将来を考えると大変不安になってくる。
- ・ 現状を考えると、家庭教育力の低下により学校での教育で担う指導が拡大しているように思う。事務処理も多いため、教員はオーバーワークながら気力で頑張っていると思われる。
- ・ 入学してくる児童の規範意識の低さ、家庭教育力ならびに学力の低下が年を経るごとに感じられる。色々な問題を抱えている児童（発達障害、話を聞けない、集中力に欠ける、自己中心的）が多くなってきていて、規律を指導することに大変な力を要する。さらに周囲のことよりも自分たちのことばかり考える保護者も増加傾向である。それに伴い、学習指導に力を入れたいと考えていながらも学級担任の児童や保護者への対応に労力を必要とってしまう現状がある。
- ・ 学級にLDやADHD、自閉症等障害を持った子がいるので指導がとても大変である。現在の多人数学級では経営が難しい面が出始めている。
- ・ 学習内容も増え行事関係、外部からの持ち込み行事等で落ち着いた学習展開ができない。児童一人あたりとの触れ合いの時間を多くすることが重要だと考えるのだが…。

【中学校】

- ・ 家庭の教育力も地域の教育力も低下し、教職員も高齢化。発達障害に悩んでいる、対人関係が築けない、学習についても基礎学力が極端に身に付いていない、等生徒は年々多様化・幼稚化し、一人一人にかかる指導の回数も増えていて指導に根気が必要。このように手間がかかる以上、教職員数を増やし育成すべき。
- ・ 授業の中で一人一人をしっかり見る時間が取れず現状としてはなかなか見届けまでいけない。
- ・ 学力テスト等により、以前に比べ実績を求められる。

【高等学校】

- ・ 40人という生徒数では目が行き届かない。一人一人に声をかけていくのが困難であるし、近年高等学校も学力差が大きくなってきてこの人数での一斉授業は限界にきている。また人数も学習指導以外の業務も多過ぎるので授業中だけでなく課題や個々への指導についても細かく対応できない。
- ・ 専門校で担任をしている。生徒の多様化ならびに学力や生活習慣の定着に差があることから、多くの知識・技能を実になるよう指導しなければならない。
- ・ 従来の子供に比べて目的を持って入学してくる生徒が少ないため、より細やかな生徒指導・教科指導を必要とする。特に基礎学力の身に付いている生徒が少なくなったように感じるので、学力不

足の対応には少人数の学級編成が必要である。

- ・ 学力が高いのに当人が放課後課外を希望しない。また、実力があるにもかかわらず学年の教師陣が推薦試験を受けさせ安易な道を選ばせる。
- ・ 下位10名ほどが授業の妨害をすることが多い。

○ 学級規模別の問題点

【少人数学級の問題点とその理由】

(人間関係上の問題)

- ・ 少子化による少人数の学級もあるが児童の位置が決まってしまうやすく、女子等気の合わない子しかその学級にいないといったふうに人間関係が固定化され難しくなると思う。交友関係も狭くなるので良くない。人間関係からするとある程度の人数がいた方が逃げ道があるかと思うので、何かトラブルがあったとしても他のグループへ入れる等人数に少しゆとりがあった方が良く考える。

(集団の中で学ぶ意義の喪失)

- ・ 子供同士の練り合いが行われず学級内の競争力が弱くなり、子供からたくましが、活動から活気がなくなる。学級の人間関係も豊かにならず学級としての仲間意識ができにくい。その兼ね合いも必要となってくる。
- ・ グループ活動・ペア活動や集団で力を発揮する時にやりにくいこともあり集団の力による学び合いが制限されかねず難しい。ひいては成り立たない学習活動も出てくる可能性があり集団で学ぶ意味が無くなる。
- ・ 子供同士のコミュニケーションの場が限られてしまう恐れがあるし、社会性や協調性が育ちづらい傾向も出てくる。また人間関係を学び互いに励まし合う等の行動が自然に行われにくいとも思われる。
- ・ 学習に関しては人数が少ない方が効果的であるが、子供たちの人格形成や多様性の必要さと思うと少なすぎても子供の中に世論が育たず良くない。考えを広めたり深めたりする場合、あまり人数が少ないと思考が硬直し広がりが無い上に意見交流が活発にできず、多様な考えに触れ学び合うことが困難だと思う。そのためある程度の人数は必要だと考える。
- ・ 指導の個別化を考えると少人数の方が指導上好ましいが、ある程度の人数がいないと「学び合い」が深まらない。小集団グループでの学び合いの充実を考えると、「少ない程良い」というわけでもなく適正な人数があると思う。ある程度の人数の中にいれば各活動が互いを「磨き合う」ことになり、人間性を見つめ合う場になると思う。そのためにも、ある程度集団が必要である。

【多人数学級（30人以上を基準として）の問題点】

(物理的負担)

- ・ 一学級の人数が多いと個に応じた指導や見取りが非常に難しくまた行き届かない。一人一人の児童へきめ細かな対応をするには教師一人で注視できるある程度の人数量があり、30人以上の学級は担任の多忙さが他に悪影響を与え指導困難になってしまうのではという不安もある。
- ・ 毎日の宿題の点検や成績処理に時間がかかり、担任一人では子供に目が行き届かない。できない

子供への対応が時間内に収まらず、休み時間を使うようになる。

- ・ 評価等を考えると大勢を見て判断するのは難しいと思われる。
- ・ やや教室が狭いような気がするし、黒板も見えにくくなってしまっているのでは…と思う。

(指導上の問題)

- ・ 個別対応を要する児童や学習時支援の必要な児童に対応しながら学級全体を指導するには多人数では困難。30 人を超えて多様な子供たちが所属する学級においては指示が通りにくくなる等一斉指導が難しい面も出てきている。
- ・ グループ学習や個人での調べ活動、ドリル学習等色々な学習形態があるが教科学習で一番多くなるのはやはり一斉学習だと思う。そうすると全ての子にきめ細かく行き届くようにしようとする人数が多いほど子供たちの待ち時間も多くなってしまふ。
- ・ 個が集団の中に埋没してしまう。児童理解も深まらない。

(子供たちの経験上の問題)

- ・ 力量不足と言われればそれまでだが、30 人を超えてくると一人一人が十分に活躍できる場が限られてくる。リーダーになる経験をする確率が低くなる、下位の児童が発言しにくくなるといった問題もあるようだ。

全日教連が考える適正な学級規模の在り方

○ 現状と課題についての教員の意識

小学校においては、学校規模にもよるが、低学年では4人に1人が、中・高学年においてもおよそ3人に1人の教員が学級31人以上の児童数を抱えている現状にある。多くの教員が現状の学級規模を適正であるとは考えておらず、全体の9割以上が30人以下の学級規模を適正と考えていることが分かる。学級経営（児童生徒指導を含む）上及び学習指導（教科指導）上の両面で、このように認識しているということは、学級の児童数が30人以上では児童一人一人に目が行き届きにくく、個に応じたきめ細かい指導を実践することに困難を感じているという実情に裏付けられているとも考えられる。また、小学校低学年ではより少人数を求める傾向が強いことも分かる。

中学校、高等学校を含め全体的に言えることは、学級経営（児童生徒指導を含む）上はある程度人数が必要だと感じている教員がどの校種にも多く、学習指導（教科指導）上はより少人数を求める傾向が強いことが分かる。

○ 適正な学級規模について

多様化・複雑化する教育諸問題に対応し、適切な指導によって児童生徒一人一人に確かな学力と豊かな心を育成するには、教職員定数改善計画を策定するとともに、義務標準法の改正を伴う基礎定数の充実が必要になる。前述の教員の意識からも、これまで全日教連が要望してきた教職員の定数改善の方向性は間違っていないことが裏付けられた。

全日教連は今後も、1学級の算定基準を40人から30人を目標に引き下げ、算定した教員数で各学

校の実態に応じて、弾力的に学級を編制できるように要望していく。

また、小学校における専科指導のための加配教員や、習熟度別・少人数指導や生徒指導、特別支援教育の充実のための加配教員を充実させていくよう、今後も国へ働きかけていく。